

## 審査の結果の要旨

論文提出者氏名 永田雅子

本論文は、1920、30年代の日本で、主に住宅建築において流行したスパニッシュ様式に関する歴史的研究である。スパニッシュ様式は、1920年頃より顕著となる日本近代建築におけるアメリカの影響の一つであり、その流行の全容を明らかにすることで、日米間の建築文化交流の一面を示そうとしたものである。

まず第1章では、既往研究におけるスパニッシュ様式の歴史的評価と、本研究の目的を示している。

第2章では、アメリカのスペイン系建築様式、すなわちスペイン植民地の建築、ミッション建築、プエブロ建築と、それぞれのリヴァイヴァル様式について、歴史と様式の特徴を示している。また1920、30年代のアメリカの作品を取り上げ、日本のスパニッシュ様式の独自性を明らかにするための比較材料を提供している。

第3章では、日本にアメリカの様式が導入された過程について論じている。1910年代半ば、武田五一はいち早くスペイン系リヴァイヴァル様式に着目しているが、日本の建築界一般は、この様式にまだ注目していなかったとし、1920年頃から雑誌書籍の輸入が著しく増加し、建築家多数が訪米するなか、アメリカ建築への関心が高まり、スペイン系リヴァイヴァル様式にも大きな関心が寄せられるようになったことを指摘している。一方、スペイン本国の建築に対しては関心が持たれず、イメージのみがスペインに求められ、日本のスパニッシュ様式は、初めから完全にアメリカの様式だったことを指摘している。

第4章では、スパニッシュ様式の流行の推移を論じている。まず、住宅設計競技においてスパニッシュ様式は流行し、1921年の設計競技でアメリカのスパニッシュ・バンガローを手本とした作品が1等に当選して以来、スパニッシュ案の入選が相次ぎ、1927年には流行のピークに達し、1928年から29年にかけてスパニッシュと和風の折衷案が提示された後、スパニッシュ案の当選は減少することを指摘している。

現実には設計競技の結果を追従するように推移し、スパニッシュ初期にはアメリカ人建築家、大林組と清水組、武田五一の教え子たち、住友當繕の建築家、1920年代前後に渡米経験のある建築家などの手により、外国人、キリスト教関係者、留学経験のある知識人、芸術家などを建築主とする個別性の強い作品が生まれたことを指摘している。

中期にスパニッシュ様式は流行のピークを迎え、住宅を専門とする建設会社や、住宅地開発を行った電鉄会社などもスパニッシュ様式を手がけるようになったとしている。そこでは、作品の傾向は二極化し、一方では

アメリカの様式に忠実な作品が作られ、日本のスパニッシュ建築を代表する作品が生まれ、また一方では、様式の「定型化」、「簡略化」、「日本化」が見られ、スパニッシュ様式は日本の住宅地に浸透していったことを指摘している。

後期までには、スパニッシュは日本の洋風住宅の主な様式とみなされ、スパニッシュと和風の折衷様式も日本の住宅の一様式として認識されていったとし、建売住宅に好んで用いられるようになり、スパニッシュ住宅は商品化したことを指摘している。

第5章では、日本のスパニッシュ様式の特徴を論じている。日本のスパニッシュ様式は主に外観に現れ、内部や平面にはほとんど影響を与えなかったとし、そのため、パティオは必要とされず、代わりに壁泉や噴水が多用され、本格的なスパニッシュの内装や家具は、一部の建築家の作品にのみ見られたことを指摘している。

第6章では、スパニッシュ様式の担い手となった建築家たちの活動と作品を、日本のスパニッシュ様式のなかで評価している。まず、W. M. ヴォーリズは、建築家個人の名前を冠した設計事務所としては最多の作品を残し、東京と京阪神を中心とする広い地域で、流行に左右されない設計を続け、質量の両面で流行を支えたことを指摘している。また関西建築界の父と称される武田五一は、スパニッシュ流行の理論的な指導者であったとし、作品は少ないが、教え子たちがスパニッシュを手がけていることを示し、さらに大林組は住宅設計競技の頃から常に流行をリードし、スパニッシュ路線を明確に打ち出していたことを指摘している。そのほか、米国留学生だった松田軍平、住友営繕の長谷部鋭吉、笹川慎一、安井武雄らは、様式を「抽象化」し、独自の建築様式を創出することに成功したと評価している。

第7章は、本論文の結論となっている。スパニッシュ様式は、一部の建築家の活動と作品を除き、一般の住宅には装飾的な歴史主義様式としてではなく、住宅を改良する手法として導入されたとし、その意味では、同時期にアメリカの影響を受けた、施工や設備などの技術やシステムと同種のものであったことを明らかにしている。またスパニッシュは時代の潮流に乗り、さらには、優れた建築家の手によって、日本化以外の方向への「抽象化」が行われ、独自の設計が行われたことは、大きな収穫であったと結論づけている。

以上、総論と各論のそれぞれによって、スパニッシュ様式がわが国近代建築成立の重要な側面を有していたことを明らかにした。従来までの断片的な捉え方から、大きな一步を踏み出したものであり、今後の近代建築史研究における新しい展望を拓いたものと言えるよう。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。